



元気っ子

No 314 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

先月の「元気っ子」で、慶応義塾高校の森林監督を、誤って高林監督を表記してしまいました。大変失礼いたしました。

この森林監督ですが、朝日新聞の「ひと」で紹介されていました。自主的な野球では勝利につながらないと言われている高校野球で、森林監督は「一人ひとりが、自ら考えて行動する野球」を掲げて取り組みました。そして「成長こそが高校野球の価値だ」という信念のもと「成長」と「勝利」の両立を追求されてきたそうです。監督の信念はこの夏、甲子園という大舞台で成就し、新しい高校野球の姿を見せてくれたと思います。監督の信じる「自ら考えることは、今後の人生の財産にもなる」という言葉は、保育においても大切にしているテーマと重なります。転ばぬ先の杖で、全てのことに大人が手を掛けるのではなく、子どもたちに考える「余白」を残すこと、子どもの小さな自己決定を尊重すること、これからの保育において大切にしていきたいテーマだと思えます。

平成 20 年告示の保育所保育指針から現在の平成 29 年告示の保育所保育指針には多くの変更・追加がありますが、その中の一つに「乳児期の発達については、(中略) 特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である」という文言の追加があります。この保育所保育指針の改訂については、核家族化の進展、地域のつながりの希薄化、共働き家庭の増加、兄弟姉妹の数の減少など子育て家庭や子どもの育ちをめぐる環境が大きく変化していることが背景にあります。先日の新聞で「京都アニメーション放火殺人事件」の裁判に関する記事を読みました。その中で、裁判員の「合法的な手続きを通して抗議する方法は考えなかったのか」という質問に対して「これまで誰かに何かを言って解決したことはない。はなから相談などは考えていなかった」という被告人答弁を見て、もしこの被告が幼い頃に愛情豊かに、応答的に関わってもらえる経験をたくさんしていたら、こんな悲惨な事件を起こさなくても済んだのではないかと考えさせられました。

もう一つ新聞からですが、映画監督のオオタヴィンさんの「脱・前例踏襲 公立小だって」という記事がありました。その中で、監督が様々な学校を取材する中で、前例踏襲をやめた学校には一つの共通点があったそうです。それは子どもファーストの観点から前例主義をやめたことだそうです。私たちの「子どもの最善の利益を常に最優先に」という観点(理念)と同じです。様々な場面で、前例踏襲ではなく、「子どもにとってどうなのか」を立ち止まって考えられる保育をこれからも大切にしていきたいと思えます。

最後になりますが、近々、保育園正面玄関に「ながさわ文庫」を開設します。保護者への本・絵本の貸し出しができるようにしていこうと思っています。詳細はまたお知らせさせていただきます。10月もどうぞよろしくお願い致します。